四島のかけ橋

第 42 号
平成20年１月１日
（火曜日）

発行所
北方領土返還要求運動
神奈川県民会議
〒231-8588 横浜市中区日本大通１
TEL 045-210-1111 内線3621
発行人　綾　井　祐　一

銀杏並木と散歩道――山下公園際

第23回県民大会を開催

会場は横浜情報文化センター

北方領土返還要求運動神奈川県民会議（会長　松田良昭神奈川県議会議長　加盟四十四団体）は、昨年十一月十五日（木）午後六時より、横浜市中区日本大通十一「横浜情報文化センター」情文ホールにて、第23回北方領土返還要求運動神奈川県民大会を開催した。

会場は、平成17年の第21回大会以来、三度目の使用となる会場で、出足もよく開場間もなく入場者も、一五三名に達した。

定刻六時、久保田政宏事務局長次長（連合神奈川副事務局長）の司会による開会の言葉に続き、主催者側を代表して、松田会長の挨拶、来賓として、松沢成文神奈川県知事、独立行政法人北方領土問題対策協会（北対協）問瀬雅晴専務理事の、当会議の二十有余年に亘る活動への敬意と、今後、益々の期待をかけた激励の言葉を受けた。

また、司会者による壇上の本会議役員の紹介があり、綾井事務局長の現在までの当会議活動報告があり、次いで、去る6月28日より7月2日まで、「ビザなし交流」の一員として、国後島、色丹島を訪問された、安慶名清氏（神奈川シニア連合）の報告があり、会場から、盛大な拍手がおくられた。

大会のメインとしての記念講演としては、元外務省欧亜局長、前東京経済大学教授の兵藤長雄氏の、『外務省で40年間、主にソ連との関わりで過した経験を元に率直な意見を述べたい』と前置された、同氏の一時間に及ぶ熱弁があり（2面）、同七時四十五分、閉会した。

理事会

大会前、別室で開かれた理事会では、「目で見る北方領土の旅」について、意見交換がなされ、特に一人当りの参加費について、出来るだけ個人負担を軽くするよう要望があった。

平成19年の主な活動状況報告

○２月１日（木）～27日（火）
懸垂幕掲出「北方の領土かえる日平和の日」
かながわ県民センター
○２月２日（金）～４日（日）
北方領土パネル展2007INかながわ
かながわ県民センター１階展示場
○２月４日～10日、19～21日
電光ニュースによる啓発広報
横浜駅西口、川崎駅東口、小田原駅東口、秦野駅前、相模原駅前
○２月７日（水）
北方領土返還要求全国大会
東京都千代田区「九段会館」72名参加
○４月13日（金）
平成19年度都道府県推進委員全国会議
東京都千代田区「都道府県会館」
○６月１日（金）
第25回関東甲信越ブロック関係者会議
第20回関東甲信越ブロック都・県民会議連絡協議会
第11回事務担当者ブロック会議
埼玉県さいたま市「ホテルブリランテ武蔵野」
○６月28日（木）～７月２日（月）
平成19年度北方四島交流訪問事業
国後島、色丹島、本県参加１名
○７月27日（金）
平成19年度県民会議理事会及び総会
横浜市西区「もみじざか　じょいぷらざ」
出席19名　委任23名
○７月28日（土）～29日（日）
第21回関東甲信越青少年交流会
東京都中央区　本県参加　教諭、中学生３名
○８月２日（木）～30日（木）
懸垂幕掲出「北方領土のかえる日平和の日」
かながわ県民センター
○８月22日（水）～23日（木）
平成19年度北方領土問題青少年・教育指導者現地研修会
県、横浜市、川崎市より各１名、計３名
○10月３日（水）～５日（金）
北方領土視察研修（目で見る北方領土）
四島交流センター、納沙岬ほか　参加者21名
○11月15日（木）
北方領土返還要求神奈川県民大会
横浜市中区「横浜情報文化センター情文ホール」参加者153名
○11月26日（月）
第24回都道府県民会議代表者全国会議
京都市「ホテルルビノ京都堀川」
○**県民会議機関紙「四島のかけ橋」の発行**
１月（40号）、８月（41号）各2500部

２月７日(木)は「北方領土の日」

毎年、二月七日は、「北方領土の日」です。

これは、北方領土問題に対する国民の関心と理解をさらに深め、全国的な北方領土返還運動の一層の推進を図るために設けられたもので、昭和五十六年一月六日の閣議により決められています。

二月七日は、一八五五年のこの日（旧歴では安政元年十二月二十一日）伊豆の下田において日露通好条約が平和裡に調印された日です。

この条約によって、日露両国の国境が定められ、択捉島など北方四島が日本の領土として初めて国際的にも明確にされました。

この歴史的な意義と、平和的な交渉によって、領土の返還を求める運動の趣旨から、二月七日は、「北方領土の日」として最も適切な日とされました。

本年も二月七日（木）、東京都千代田区の九段会館で、全国大会が催されることとなっています。

この日、福田内閣総理大臣の挨拶があり、壇上には自民党から共産党に至るまで与野党代表の国会議員が居並び、文字通り国民的集会と成っております。

詳細につきましては、別途、事務局から加盟団体へご連絡しますので、ご参加をお願いいたします。

灯台

当県民会議が結成されたのは、昭和六十年十一月、一九八五年であり、以来今年で満二十二となる。

大会には、記念講演として、昨年の大会までに、二十二名の諸講師にお願いしてきたが、多士済済、それぞれに個性にあふれ、魅力あふれる方々だったが、昨年の大会でご足労願った、兵藤長雄先生は、永く記憶に残る講師としての存在となろうと思う。

兵藤先生は、講演の冒頭で、『外務省で40年間、主にソ連との関わりで過した経験を元に率直な意見を披露したい。』と述べられたが、淡々とした語り口と、静かな中にも説得性ある言葉は、一時間の講演時間を更に短く感じさせた。

特に、『ソ連が崩壊するなど誰が想像したでしょうか。』と触れられ、ゴルバチョフ、エリツィン、そしてプーチンと政権が変る毎の、国内経済情勢、国際情勢への対応と、目まぐるしく変る状況を解り易く説明され、私達が新聞紙上でしか知り得ない事が、具体的に説明され、感銘を与えた。また、日本国内で報道された、いわゆる「二島返還論」について、相手国ロシアでさえ『四島一括ではないのか？』と、驚いていたとの話に、今更に恥かしく思った。

何かどっしりした感のあるロシア側と、せっかちで、あれこれ思案がちなこの国だが気持を新たにし、同志と手を握りあって、返還一路を進もうと思う。（蓮見）

四島（しま）返還 ぶれない主張支える世論

平成19年度標語入選　優秀賞　神奈川県横浜市　阿部 浩

外務省で40年間ソ連との関わりで体験した私見

兵藤 長雄

現在のプーチンロシア

プーチンはここ6～7年という長年に亘り国民の圧倒的な支持を受け続けている。ロシアでは非常に珍しい指導者です。最近ロシア内では、「皇帝（生涯の王様）」のような存在になってきたとの声があり、欧米からは少し"独裁者"的な色彩が強まったとの批判もあがるほどです。ロシア大統領は憲法で2期8年の任期とされていますが、「皇帝」と呼ばれるのはこのあたりに変化が現れたからです。9月にミハイル・フラトコフ首相を事実上クビにして、かつてサンクトペテルブルグで部下であったヴィクトル・ズブコフという66歳の無名の政治家を首相に任命しました。10月には「12月に選挙に勝ったら自分が首相になってもいい」との発言がありました。現状ではズブコフが大統領候補です。仮にズブコフが高齢で引退するとなると、時の首相が大統領になる。つまりプーチンが大統領に返り咲くことができるのです。しかもその時点から8年もの間です。また、四五〇の下院議席を取り、憲法改正をし、首相が実権を握るように変えることも可能です。どちらにしてもプーチンは長期にわたり実権を握ることが可能になります。

なぜ人気があるのか

エリツィン時代は共産経済を壊す時代でした。しかし、官から民への流れの中で、国有財産を払いうけたのは一部の共産党幹部だけであり、一般国民は賃金も年金ももらえないような状況に陥りました。人事権も地方に権限委譲され、経済も治安もバラバラ、内政が不安定なこのような状態では外交に乗り出す機会はなかなかなかったのです。国際政治でロシアが無視された時代でもあります。

プーチンは強いロシアを目指し、エリツィンの負の遺産を短期間のうちにプラスに変えて行きました。資源の価格高騰を背景に、実質賃金をあげ、年金を支給し、大衆の消費社会を実現させました。再び中央集権化を進め、二大政党制を目指し選挙改革を行った結果、統一ロシアという自身の政党が圧倒的な勝利を収め、反対勢力はほとんどないという、大政翼賛的な状態になりました。そして、言論統制も行い、批判的な意見を抑えこんだのです。

ロシアは混乱期から立ち直り、外交面でも再び強いロシア外交を推進するようになりました。「米一極支配は許さない」との姿勢に基づき、親米派の国にも外交交渉を持ちかけるなど積極的外交と国づくりを進め、ロシアは変わりました。

外交路線の変化

そういう背景の中で、外交はより強硬路線へ移行を始めます。北方領土における考え方も日ソ共同宣言時に逆戻りしてしまいました。北方四島も含め、極東について予算措置も含め考えていくと発言し、実際、色丹島にも立派な学校が建ちました。これが北方四島へのインフラ投資第一弾です。ラブロフ外務大臣が開校に参加するなど、力を入れていくとの姿勢が表明されています。本格的インフラ整備の準備も始まった模様で、明らかにこれまでとは違います。

また、国境線の長い中国に対しては協調路線を推進し、領土問題を解決、本格的合同軍事演習するなど、友好関係を強化し始めました。かつては日本の経済がロシアの経済発展に不可欠と思われていたのですが、方向を転換し、経済面でも中国との関係を強化させていきました。

悲観論

このような状況の中から、北方四島の一括返還はもう無理なんじゃないか、だったら3島でも、又は2島でもという意見が出始めたのかもしれません。しかしこれにはロシア人もびっくりしています。日本人は4島返還で一致していたのではないのか？と。日本から間違ったメッセージを与えてしまっているのが、返還交渉が停滞している一つの要因なのではと考えます。

ロシアの姿勢の変化

過去を振り返ると、ロシアの姿勢は、国内・国際情勢で大きく揺れ動いてきたのが内部から見た実感です。ニクソンショックの時、日本が中国関係を緊密にする態度を示した際、ソ連は平和条約への歩みよりを見せたこともあります。しかし、その後また態度が硬化し、北方四島周辺に軍隊も派遣されてきました。

詳細に見ると国際情勢によっていろんな姿勢を見せているのが分かります。

一番柔軟な時代はゴルバチョフ時代とエリツインの初期です。昨年、ロシアで見つかった文献では、北方領土についての自由討論されたものが発見されましたが、この中の側近の発言に『日本の主張に理がある。四島返還すべし』という意見もあったことが明らかになっています。しかし、その時のゴルバチョフにそこまでの力はすでにありませんでした。ちなみに、ビザなしの四島交流はこの時代に提案され始まったものです。

中ソ関係と日本見直し論

合同軍事演習など、中国との関係を強化してきたロシアですが、実はここ1年くらいで関係に変化が見られます。

資源輸出国から加工品輸出国への転換を図りたいロシアに対し、中国は資源としての輸入を希望しているためです。ロシアが必要とするのは省エネなどの技術などのソフト面です。そこで、日本見直し論が浮上しつつあります。

実際に経済協力のための外交は頻繁にされているのは事実です。

北方領土問題の見直し

元島民の平均年齢は、75歳近くになり、すでに5割強の方々が亡くなっています。

運動の高齢化、疲弊が問題となっています。

日本人の多くには、北方領土問題イコール根室の問題との認識があるのではと思われます。しかし、本質を考えれば、日本人すべての問題なのです。そういう体制作りを政府が構築していく必要があります。

しかし、政府自身が本質を間違えている可能性があるように思われます。

国家の尊厳に関わる領土問題を、日本国民の問題として、本腰入れて政府に取り組んでもらいたいと考えます。

しかし、もっとも大事なことは、国民がこれを支持し、若い世代にこの問題を伝えていくことです。

「百聞は一見にしかず」修学旅行などで知床などとともに、ぜひ根室へ行っていただきたいと思います。

現在、ロシアは日本の様子を窺っています。

最終的には、日本国民の支持というものが大事になってきます。

これが40年間、ロシアに関わってきた中での私見であります。

返還の可能性

国際情勢の流れは多面的です。

東西ドイツの合併など誰が想像したでしょうか。

ソ連の崩壊など誰が想像したでしょうか。

歴史の教訓を振り返ると北方領土問題も同様であると考えます。機会の窓は閉ざされているわけではないのです。

なぜ返還を求めるのか

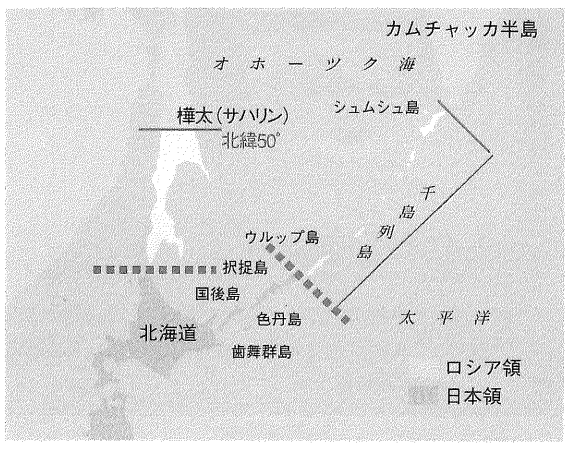
北方四島の返還を求めることにおいて、この問題を経済的価値で図ってはいけません。

第二次世界大戦の後半、スターリンの指令では、ソ連軍は、ウルップ島（千島列島と北方四島の国境線）で、引き返すはずでした。

事実、ヤルタ協定では、千島列島18島と確認しています。ソ連は、北方四島にアメリカ軍がいないことを確認して、終戦後の9月に不法占拠したというのが事実です。

過去の欧州や、最近の中ソの領土解決とは本質が違います。

サンフランシスコ平和条約（1951年）



1951年、サンフランシスコ平和条約が署名され、日本は、千島列島と北緯50度以南の南樺太を放棄した。同条約にいう千島列島には固有の領土である北方四島は含まれていない。

また、ソ連はこの条約の署名を拒否しており、この条約上の利益を主張し得ない。

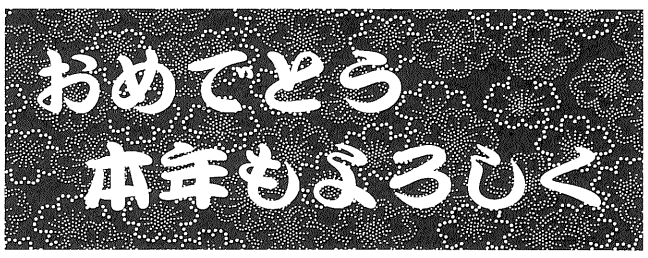
プロフィール　兵藤長雄氏

一九三六年生まれ
一九六一年
東京大学法学部卒業
一九六一年外務省入省
欧亜局長、在ポーランド大使、在ベルギー大使歴任
二〇〇〇年～〇七年
東京経済大学教授
☆「善意の架け橋―ポーランド魂とやまと心」文芸春秋社など多数の著書。

編集後記

◇新年、明けましておめでとうございます。

◇私の記憶が正しければ、「北方領土に関する標語」で平成19年度入選の中で、本県横浜市の阿部浩氏が優秀賞に輝いたのは、初めてのことと思い、2面上部に載せさせてもらいました。面識はありませんが、ここにも同志の方が居られるとは心強い限りです。

◇1面の「灯台」にも感想を書きましたが、2面に可能の限り載せました。（兵藤先生の講演）よろしく。

（蓮見）